自治体名：さいたま市
学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：さいたま市立桜山中学校
ご記入者：田中　啓

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500 文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

１，さいたま市教育委員会が目指している目標（ビジョン）とその背景

さいたま市教育委員会では、本市の教育が目指す人間像の実現に向け、全国に先駆けた教育施策や本市独自の教育施策を展開し、日本一の教育都市を目指している。

（１）本市の教育が目指す人間像

「世界と向き合い 未来の創り手として 輝き続ける人」

〇 グローバル化、情報化など予測が困難な未来に対応し、多くの情報の中から何が必要かを主体的に判断し、自ら立てた問いの解決を目指し他者と協働しながら最適な解を見付け、新たな価値を創造することができる人

〇 多様な人々との関わりの中で共感し、人間ならではの感性、創造性を発揮しつつ、自らの可能性を高めながら、よりよい人生、よりよい社会を創り出していくことができる人

〇 生涯にわたって質の高い学びを重ね、夢と志を持ち、生きがいを見付け、健康で幸せに暮らすことができる人

（２）基本理念と基本的方向性

【基本理念】「人生１００年時代を豊かに生きる『未来を拓くさいたま教育』の推進」

【基本的方向性１】１２年間の学びの連続性を生かした「真の学力」の育成

〇他者と協働しながら新たな価値を創造していく力を育成する。

〇夢を実現しようとする高い志を持って、可能性に挑戦する力を育成する。

【基本的方向性２】グローバル社会で活躍できる豊かな人間性と健やかな体の育成

〇コミュニケーションを通じて人間関係を築く力、豊かな情操や規範意識、ものごとを最後までやり抜く力、社会的・職業的自立に向けた能力・態度等を育成する。

〇生涯にわたってたくましく生きるために必要な健康や体力を育成する。

【基本的方向性３】人生 100 年時代を輝き続ける力の育成

〇生きがいを持ち、生涯にわたって質の高い学びを続けられる環境を整備する。

〇人生を豊かに生きるために、学んだことを生かして活躍できる環境を整備する。

【基本的方向性４】

〇学校・家庭・地域・行政の連携・協働体制を構築し、地域の教育力の向上を図るとともに、地域に信頼される学校づくりを推進する。

〇地域の多様な教育資源を活用し、地域コミュニティの活性化と、地域発展の担い手となる人材を育成する。

【基本的方向性 5】「未来を拓くさいたま教育」推進のための基盤整備
○新しい時代の教育に向けた学校の指導体制を構築する。
○安全・安心で質の高い教育環境を整備するとともに、学校安全体制を推進する。

２，さいたま市立桜山中学校が目指している目標（ビジョン）とその背景
本市の目指している目標（ビジョン）を受け、本校では学校教育目標を「学べ・磨け・輝け」と掲げ、目指す学校像を「生徒が生き生きと主体的に学び、豊かな心身を育む学校」と定めて教育活動を実践している。これらの実現を具体化するため、令和５年度は学校課題研修のテーマを次のとおり設定した。
「生徒たちに自信を持たせるための各教科領域における基礎学力を向上させる取り組み
『誰一人取り残さない学校の実現』
～ユニバーサルデザインの視点を軸にした基礎学力向上のための教育課程の工夫～」
本校生徒は、基礎学力に大きな課題があることに加え、成功体験の不足による低い自己肯定感、発達の偏り、複雑な家庭環境など様々な背景から多様な困難さを抱えている。そんな生徒の基礎学力向上、自己肯定感向上、自己実現の達成を果たすべく、全校生徒約 170 名の一人ひとりに丁寧に寄り添い、全教職員が教科や学年を超えた「チーム学校」として実践を重ねている。

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦労を教えてください。（1,500 文字以内）

本校は、市内教職員による研究組織「さいたま市教育研究会」の国語専門部授業研究会場に令和５年度は指定されており、市教委や学校のビジョンを踏まえつつ、国語専門部の研究主題に迫り、かつこれからの国語科に求められる指導の在り方の指標となるよう、市内の国語科教員全体で共有するにふさわしい授業づくりのノウハウやヒントを模索し、提案を行った。
埼玉県公立高校入学者選抜方法が現小６対象から大きく変わるという最新の動向が報道され、県内全ての受検生が自分の３年間を「自己評価資料」にまとめて提出することになる、という概要が示された。これを受け、中学校国語科における「自己評価資料」作成に活用できる資質能力の育成が今後求められ、その指導方法の研究が急務であると考えた。市内で採用の中学校国語教科書（教育出版）では中３の単元に「自己ＰＲ書」を書く内容があり、これをミライシードの活用で充実させる授業づくりを１つのモデルとして提案した。
（１）自己肯定感を高める題材設定の工夫を、ムーブノートを活用して
自己ＰＲ書には、自身の良さや長所、強みなどを述べたいところであるが、生徒には自分のそれらを認識していない、自覚していない、「自慢できることがない」あるいは「自分には何の取り柄もないと思う」ということもある。しかしどの生徒にも必ず良さ、長所、強みなどはある。その気づきを協働的に得るために、ムーブノートの広場を活用した。自分の良さをカードに入力して広場に置く（思いつかなければ空欄でもよい）。広場に置かれた他者のカードを見て、コメント機能を活用してその人の「良さ」に同意したり、追加したり、認め合う言葉を選んでコメントに入力する。これらを通して、自身のＰＲポイントを協働的に見つけ

ることができ、教室の全員が気持ちよく授業に取り組むことができる。自分では思いつかなかった良さを友だちが見つけてくれるなど、自己肯定感・自己有用感も高められる取組となった。

（２）入試にも生かせる「２００字作文」の習慣化を、ムーブノートを活用して

埼玉県公立高校入学者選抜の学力検査問題における国語の課題作文の設問は、１５字×１３行の１９５マスであり、ムーブノートのカードのテキスト枠がこれとほぼ同じ２００字の制限である。このことから、この文章量の作文に慣れさせるため、課題作文の学習はムーブノートで取り組んで広場に提出させるようにしていた。自己ＰＲ書を書く学習においても、２００字作文とすることで、書き慣れた長さに文章量を調整し、「作文＝大変」という負担感を軽減し、文章の内容に重点をおいて学ばせることができた。

また書いた文章を広場で共有することで、書くのが苦手な生徒にはヒントとなり、書き終わった生徒にはコメント機能を活用することで文章として協働的に練り上げることができた。

（３）課題や苦労

題材設定や、書き終えたあとの交流において、漠然と褒め合うだけで満足してしまう場面がみられた。経験として書いた内容が具体性に欠けて根拠が弱い場合や、一般論のようになってしまって「その人らしさ」に乏しい場合もあった。

広場のカードの名前を見て効果的にコメントを書ける場合もあれば、逆に忖度になってしまう場合もあるので、名前のオン・オフ機能の意図的活用の必要を感じた。

また、ムーブノートの活用によって学びの主体を生徒に預けられる良さはあるが、これをコーディネートする教師が全体と個々を把握しておくことが必要である。「教え方」というより「学ばせ方」の工夫がこれからの教師に求められると感じる。

③ (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000 文字以内）

１，教師の指導や働き方の変化

（１）授業準備や授業中の物的・時間的コスト（多すぎる紙、余計な手間）の大幅削減

本校生徒は基礎学力が大きな課題であり、板書をノートに視写する、学習内容をノートにまとめる、といったノート中心の学習は困難な側面があり指導の労力が大きいという実態がある。そのため書くことの量を調整したり思考の流れに沿って構造化したりしたワークシートを活用する場面が多かった。しかし、それをファイリングして管理するのが困難な生徒も少なくなく、ポートフォリオ的な蓄積をしたいという理想とそれが容易でない現実との乖離に悩むこともあった。ワークシートのデータ作成や印刷にもそれなりの物的・時間的コストがかかってしまっていた。

ＩＣＴの活用はこの問題をクリアできる部分があり、クラウド上でオクリンクやムーブノートを活用することで、単元や本時の目標に焦点化して学習に取り組ませることができる。学習を振り返る際も、ファイルを開けて該当のワークシートがどこにあるか探すところから始めていたのが、画面上で容易に操作することができることから、大幅に時間短縮でき、非常に効率的である。

またワークシートを印刷することで生じていた紙やインクをはじめとする印刷コストを大幅に削減でき、学校配当予算や浮いた時間を有効活用することにつながっている。

（２）個別の学習の管理や添削指導のコストの大幅削減

ノートやワークシートの活用を中心としていた授業では、成果物を提出させる場合、その回収、点検、個別の添削指導など、かなりの時間と労力を割く必要があった。特に課題作文の添削指導などはいくら時間があってもきりがないもので、かといって片手間に行うわけにはいかない。提出した生徒は自身の提出物に教師の朱書きがあることに期待するし、朱書きがあればあるほど喜んだり、書く力も意欲も向上したりするものである。

物的・時間的コストを抑えてこれらを充実させるのに、ＩＣＴ活用は非常に有効である。成果物の提出に、オクリンクの提出ＢＯＸや、ムーブノートの広場を活用することで、回収やその確認がスムーズになり、評価も容易になる。浮いた時間で個別の添削指導を充実させることもでき、生徒の資質能力を育成し意欲も向上させることに、ＩＣＴが大きく役立っていると感じる。

２，生徒の学び方や学習への態度、成果などの変化

（１）「いつもの」ツール活用によるストレスのない学びの連続性の確保

ノートやワークシートを中心とした学習は、教師によって指導方法が当然異なることから、その「先生によって違う」が生徒のストレスになることもある。ミライシードのオクリンクやムーブノートは構造が単純であるがゆえに汎用性が高く、教科等を超えて同様に取り組ませることができる。これらを複数の教師が日常的に活用することで、生徒にとってそれらが「いつもの」ツールになる。仕組みや操作性が同じであることから抵抗なく使用でき、単元や本時の目標に迫る学習活動に集中して取り組ませることができる。これらは「教育のＵＤ（ユニバーサルデザイン）化」の視点に立っており、いつでもどこでも誰でも同じように取り組めるという点がＵＤであり、学びの連続性が確保できるようになったと考える。

（２）「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる学び方の定着

まず「タブレットＰＣを使うというだけでやる気が出る」という生徒もいるほど、ＩＣＴ活用は学習意欲の喚起に有効である。（１）のとおりストレスのない「いつもの」ツールを多用することで、学びの入口のハードルが下がり、主体的な学びにつながるきっかけとなっている。またオクリンクの提出ＢＯＸやムーブノートの広場の中で自身の学びの成果物やその過程がみんなの目に見える形で扱われることは自己有用感につながり、主体的な学びにつながっている。

ムーブノートは広場に置かれた友だちのカードからヒントを得たり、コメント機能を活用して意見を添えたり良さを認めたり改善点を指摘したりできることから、クラウド上で対話的な学びを効率的に充実させられている。

これらの主体的で対話的な学びの実現から、深い学びへとつながる学び方が日常的に実践できるようになったと考える。

３，これらの変化に対する評価（ＩＣＴ活用による「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の実現への期待）

ＩＣＴを活用することで、教師の労力やコストを軽減しつつ、生徒が自ら学び方を選び、主体的に取り組み、まずは自力で頑張り、次に他者と対話的に取り組み、深い学びへとつなげられている場面が増えている。これらは「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」にそのままつながるものであり、ＩＣ

Ｔ活用は令和の日本型学校教育の推進に欠かせないものであると、目の前の生徒の学び方、教師の教え方や学ばせ方、働き方などを見て確信している。

④　お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1 つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000 文字以内）

１，オクリンク

（１）国語の「読むこと」における、説明的文章の段落構成の学習

本校生徒は、説明的文章を読んでも「難しい」「何が書かれているか分からない」「そもそも読む気がしない」などの困難を抱えている。この読解には、接続語や指示語、主題やキーワードをもとに読み進めるのに加え、小学校から系統的に学んでいる段落構成「はじめ（序論）」→「なか（本論）」→「おわり（結論）」を踏まえた読みが必要である。そこで初読後に初発の感想をまとめた次の時間などに、オクリンクのカード１枚ずつに形式段落１つずつを入れ、カードの順序を入れ替えたものをつなげて生徒に配布し、この並べ替えに取り組ませる。一度読んだことのある文章がバラバラの順序になっているものをもとに戻すことにゲーム感覚で協働的に取り組む活動を通して、筆者がどのように問題提起し、具体例を挙げ、筆者の主張へとつなげているかを理解することにつながっている。

（２）国語の「書写」における「試し書き」の提出と終末の「まとめ書き」との比較

本校生徒は、「うまく書けたことがない」という経験や先入観から、書写の授業に苦手意識を感じていることが珍しくない。また硬筆や書きぞめの課題に取り組む際、基準として配布される参考手本のように書けない、だから自分はうまくない、という感覚にとらわれがちである。そこで初回の授業で取り組んだ「試し書き」をタブレットＰＣで静止画撮影し、そこに改善したいことを書き込んでオクリンクで提出し、練習段階や終末の「まとめ書き」と比較して、正しく整えて書くためにどのように改善できたか（生徒には「いかに自己ベストを更新できたか」という表現で説明）を考えさせている。持ち物の自己管理が苦手な生徒は試し書きを紛失することも多く、教師が管理するのも煩雑であるため、画像で保管できるのは非常に有効である。

２，ムーブノート

（１）国語の「書くこと」における課題作文の協働的学習

本校生徒は、以前は課題作文の学習に苦手意識を強く感じていることが多く、定期テストでの課題作文問題には無回答（初めからあきらめて何も書かない）の生徒が少なくなかった。ムーブノートのカードのテキスト枠は２００字の制限があるが、埼玉県公立高校入学者選抜の学力検査問題における国語の課題作文の設問は１５字×１３行の１９５マスであることから、この文章量の作文に慣れさせるため、課題作文の学習はムーブノートで取り組んで広場に提出させるようにした。教師が全員分を丁寧に添削するのは煩雑であるが、広場でカードを共有することで、コメント機能で友だちと作文のよく書けているところや改善点を指摘し合い、教室での対面による話合いとコメントによる話合いの両方で協働的に取り組ませることができた。他者の文章を吟味することで自身の書く力の向上につながっている様子が見られた。

（２）教科や道徳等における、自分の意見を述べる場面でのコメント機能等の活用

現在の学校教育では、自身の考えを自分の考えで表明することを求められる場面が多い。しかしながら、考えを言語化することが苦手であったり、それをみんなの前で発表することが苦手であったりと、様々な困難から自分の意見を述べられない生徒が少なくなかった。そこで考えを述べたり共有したりするツールとして、教科の学習や道徳など様々な場面でムーブノートのカードを多用している。発達の特性や偏りのある多様な生徒がいる中、口頭で話し言葉で発表するのが得意な生徒もいれば、ムーブノートなどで書き言葉で発表するのが得意な生徒もいる。特にスマホでＬＩＮＥのチャットなどに慣れている現代の中学生には、いわゆる「打ち言葉」で画面上で意見を述べるほうが抵抗ない生徒も少なくない。発表方法を限定せず、様々な生徒が自分の得意なやり方で自身の考えをなるべく抵抗なく表明できるよう、ムーブノートの広場を頻繁に活用している。

例えば道徳では生徒の考えを引き出せなければ学びが深まらないこともあるが、ムーブノートは考えを発信しやすく、広場を見ればそれを高い一覧性で共有でき、さらにコメント機能を使えばそれに賛否を表明したりするのも容易である。少数の意見もとりあげられ、教室の全員で主題に迫ることができる。

例えば国語では、教師の発問に対し様々な意見が広場に集まった後、いくつかをピックアップして「みんなからこんな感じの意見が出たけれど、どう思うか？」とさらに考えを深める問いを投げかける。その返事は口頭でもコメント機能でもよいこととし、どんな考えも拾い上げる。自分の考えが必ず取り上げられ生かされることで自己有用感を味わわせることができ、「わかった、できた、もっとがんばりたい」につなげられるツールとしてムーブノートは非常に有効である。